



インザ・ミソスープ

村上
育

村上龍

読売新聞社

蘇工業学院図書館
蔵



インザ・ミソスープ

1997年(平成9年)10月16日 第1刷

1997年(平成9年)11月1日 第4刷

むらがみりゅう
著者 **村上 龍**

©1997 Murakami Ryu

編集人 **梅田康夫**

発行人 **伏見 勝**

発行所 **読売新聞社**

東京都千代田区大手町1-7-1 〒100-55

大阪市北区野崎町5-9 〒530

北九州市小倉北区明和町1-11 〒802-71

名古屋市中区栄1-17-6 〒460-70

印刷所 **凸版印刷株式会社**

製本所 **大口製本印刷株式会社**

定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

インザ・ミソスープ

装画——村上龍
ブックデザイン——鈴木成一デザイン室

第一部

おれの名前はケンジ。わたしの名前はケンジと申します。ぼくはケンジ。あたしケンジっていうのよ。日本語にはいろいろな言い方はあるがそれは何のためなんだろうな、と思いつながら、おれはそのアメリカ人に、マイネーム イズ ケンジ と言った。おお、君がケンジか、とそのアメリカ人は大げさな身ぶりで喜んで見せた。よろしく、と言って、おれはその太ったアメリカ人旅行者と握手をした。西武新宿駅のすぐ近くにある、外国だったら二つ星と三つ星の中間にランクされそうなホテル。それがおれとフランクの記念すべき出会いの瞬間だった。

おれは二十歳になったばかりで、英語が完璧に話せるわけではないのだが外国人観光客のアテンドの仕事をしている。主に風俗的な観光のアテンドだから完全な英語は必要ないのだ。エイズ以来、外国人は風俗では人気がない、というより露骨に敬遠される。それでも遊びたいという外国人は大勢いて、そういう連中に比較的治安のいいキャバレーやファッションヘルスや性感マッサージやSMバーやソープランドを紹介してやって紹介料をもらう。誰かに使われているわけではないし、事務所を持っているわけでもないが、外国人向けの旅行案内の雑誌に簡単な広告を出すだけで、目黒区のこぎれいなワンルームマンションに一人で暮らさせてたまには女の子と焼き肉

でも食べられて好きな音楽を聴き好きな本を読めるくらいの金は稼いでいた。ただし静岡で小さな洋服の店をやっているおふくろには予備校に通っていることになっている。中学二年のときに親父が死んで、以来おふくろは一人でおれを育ててくれた。高校の仲間の中には平気で自分のオフクロを殴ったりするのがいたが、おれはそういうことはしなかった。おふくろには悪いと思うが、おれは大学へ行く気はない。理数系の専門職に就くには決定的に勉強が足りないし、文系は結局サラリーマンになるしかない。なかなかうまくはいかないと思うが何とかそれなりの金を貯めてアメリカへ行きたかった。

「ケンジオフィスですか？　わたしはアメリカ合衆国からきたツーリストで名前はフランクとい

います」

去年の十二月二十九日、午前中の遅い時間にその電話があったとき、おれは殺された女子高生の記事を新聞で読んでいた。手足と首を切断されて殺され歌舞伎町のゴミ収集場に捨てられていた女子高生は、数人のグループで新宿を中心に派手に稼いでいて大久保近辺のラブホテル街では有名な顔だった、死体の発見現場は歌舞伎町でも人通りの少ないところで今のところ目撃者はなく捜査は難航するだろう、被害者には気の毒だがこの事件で援助交際という響きのよい言葉の裏にある恐ろしさを女子高生も自覚できたのではないか、被害者の仲間の女子高生達はもう絶対に売春なんかやりませんと口をそろえて言っているという、新聞にはそういうことが書いてあった。

「はい、フランク、調子はどうだい」

おれは新聞をテーブルに置いて、いつものように応じた。

「オーケーだよ、ところでツアーアテンドをお願いできるのかな、今頃は外国人向けの旅行案内の雑誌を見て電話してるんだけど」

「トウキョウ・ピンク・ガイドかな？」

「そうだ、どうしてわかるんだ？」

「それはね、その雑誌にしかぼくのオフィスの広告は出てないからだ」

「なるほど、それで今夜から三日間、案内を頼めるかな」

「フランク、君は個人？ それともグループかな」

「個人だよ、グループでなくてはいけない？」

「そんなことはないけどかなり割高になる、六時から九時までの三時間で一万円、九時から十二時までの三時間が二万円、十二時を過ぎると一時間につき一万円だ、税金はとらないけど、一緒に食事する場合や、バーで一緒に酒を飲む場合はぼくの分も払ってもらうことになる」

「オーケー、問題ないよ、九時から十二時までのコースで今夜から頼みたいんだが、どうかな、三日間予約できる？」

三日間といえば、大晦日までで、一つだけ問題があった。おれにはジュンという彼女がいてクリスマスと一緒に過ごすという約束を破ってしまったままになっていた。大晦日のカウントダウンは絶対に一緒にいるよ、とつい先日指切りをしたばかりだったのだ。ジュンは援助交際をしないと決めている女子高生で怒ると手に負えないところがある。でも仕事は欲しかった。この仕事

を始めてから二年弱になるが、貯金は目標額に達していない。大晦日の夜は適当な口実を見つけて早く仕事を切り上げればいいだろう、そう思って、おれはフランクに、オーケーと言った。

「オーケー、九時十分前にホテルに行くよ」

フランクはロビーの端にあるカフェレストランでビールを飲みながら待っていた。彼自身が説明してくれた特徴によると、白人で、太っていて、横顔が少しだけエド・ハリスに似ていて、白鳥がプリントされたネクタイをしているということだったが、外国人は一人しかいなかったのですぐにわかった。自己紹介と握手をして顔をよく見たが、横から見ても正面から見てもエド・ハリスにはまったく似ていなかった。

「もう、すぐに出かける？」

「あなた次第だよ、フランク、東京のナイトライフについては雑誌にすべて書いてあるわけじゃないから説明が必要だったら今やっという方がいいかもしれない」

「おお、いい響きだ」

「何が？」

「ザ・ナイトライフ・イン・トウキョウ、何かわくわくしてくる言葉の響きじゃないか」

フランクは、エド・ハリスが映画でよく演じる軍人や宇宙飛行士ではなく、証券会社のセールスマンのようだとおれは思った。ただしおれは証券会社の本物のセールスマンを間近で見たことがない。つかみどころがなく顔つきや服装が平凡な人間を見ると証券会社のセールスマンのように思う癖がついているだけだ。

「ケンジはいくつなんだい？」

「二十歳だ」

「日本人は若く見えると聞いてきたんだけど、君はちゃんと二十歳に見えるよ、十五歳でも三十歳でもなく二十歳に見える」

おれは、郊外にある紳士服の安売り店でスーツを二着買って持っていて仕事のときはそれを替わりばんこに着ることにしている。この季節だとそれに加えてコートとマフラーが必要だ。髪も普通の長さで、染めていないし、ピアスもしていない。たいていの風俗の店はエキセントリックな格好を嫌う。

「フランクは？」

「ぼくは三十五歳だ」

フランクは笑顔をつくってそう言ったが、そのときおれはフランクの顔の妙な特徴に気付いた。非常に平凡な顔なのだが、年齢がわからない。三十五と言っているが顔に当たる光の角度によっては、二十代にも見えるし四十代にもいや五十歳だと言われても納得したかもしれない。それまで二百人近い外国人を見てきてその大半はアメリカ人だったが、フランクのような顔は初めてだった。そのうちおれはその顔の特徴がわかった。皮膚の感じがちょっと変わっていて人工的な感じがするのだ。まるで大火傷を負ったあとによくできた人工の皮膚を貼りなおしたような、そんな感じだった。そういうことを考えていると、殺された女子高生の新聞記事を思い出してしまった。

「いつ日本に来たの？」

コーヒーを飲みながら、そうおれは聞いて、フランクは、一昨日だと答えた。フランクはビールをゆっくりと飲む。まず口元までグラスを持ってきて、まるでそれが熱い紅茶であるかのように白い泡をしばらく見つめる。そしてひどい味の薬を飲むように、ほんの少しの量を口から喉へと流し込んだ。こいつはとんでもないケチかもしれないぞ、とおれは思った。主にアメリカ人が利用する英語版の日本旅行案内にはホテルのレストランでは絶対に食事をしないようにと書いてある。近所に必ずファーストフードの店があるのでそこでハンバーガーを食べ、ホテルのレストランやバーではビールを一時間かけて飲むつもりで飲むこと。コーヒーは信じられないほど高いので避けるべきである。トキーの一流ホテルのレストランのばかげた値段を実感したい旅行者はスクイーズとメニューに表示されているフレッシュオレンジジュースを飲んでみるとよい。仰々しいグラスクーラーに保護されて差し出される単にオレンジをしぼっただけの液体は最低でも八ドル、最悪の場合には十五ドル取られることも珍しくない。我々は日本政府の関税を飲まされているのである……

「仕事で来たの？」

「ああ、そうだよ」

「仕事はうまくいった？」

「とてもうまくいったよ、ぼくはトヨタの車のラジエーターを東南アジアのある国から輸入していてそのライセンス契約で来たんだけどね、電子メールで契約書のドラフトを何度もやりとりし

ていたから一日で終わったよ、何というかパーフェクトな仕事だった」

少し怪しいな、とおれは思った。日本のほとんどの企業は今日二十九日が仕事納めになっているがアメリカではとくにクリスマス休暇に入っているはずだ。それにこのホテルもフランクのファッションも、トヨタとかライセンス契約とか電子メールとか、そういうイメージではない。おれの今までの経験によると、新宿に滞在するアメリカ人ビジネスマンは、メジャーな順に、パークハイアット、センチュリー・ハイアット、ヒルトン、京王プラザ、の四つのホテルのどれかに泊まるし、大事な契約がある場合には特に服装には気をつけるものだ。フランクのスーツは、おれの「替えズボン付きヤングビジネスマン向けスリーピース紳士服・コナカ特別価格二万九千八百円」より安そうで、色も品のないクリーム色だったし、だいいち小さすぎてズボンの股のあたりは今にも裂けそうにばんばんに張っていた。

「仕事がうまくいって何よりだね、それで今夜は基本的に何をしたいのかな？」

そう聞くとフランクは、

「セックス」

と照れて笑いながら答えたが、おれはそういう照れ笑いをするアメリカ人を今まで見たことがなかった。

アメリカ人に限らず、どんな国の人間でも完璧な人格というものはあり得ない。必ずいいところがあり、悪いところもある。それがこの仕事でおれが学んだことだ。アメリカ人のいいところをおおざっぱに言えば、気さくで無邪気な点だと思う。ちなみに悪いところはアメリカ以外の世

界という価値観をイメージできないということ、それは日本人の欠点にも似ているが、いいと思ったことを積極的に相手に押しつけるという点で、よりタチが悪い。そのためにおれは彼らの前でタバコが吸えないことが多いし、ジョギングによくつき合わされる。簡単に言ってしまうえば子どもっぽいことになるが、そのせいか彼らの笑顔は親しみやすい。特に照れ笑いが可愛いといつもおれは思う。ロバート・デ・ニーロもケビン・コスナーもブラッド・ピットも、アメリカの男優の照れ笑いが魅力的なのは国民性なのだ。フランクの照れ笑いはまったく可愛くなかった。どちらかといえば恐かった。奇妙に人工的な皮膚が複雑な皺をつくって、顔の造作が一瞬壊れてしまったように見えた。

「トウキョウ・ピンク・ガイドによると、本当に何でもあるんだね」

「フランク、君が読んだトウキョウ・ピンク・ガイドは雑誌だよね」

「そうだ、でも本も読んだよ、でも本にはケンジのアテンド・オフィスは載っていないかったんだ」

トウキョウ・ピンク・ガイドというのはステイブ・ラングホーン・クレメンスという人が書いた名著だ。ホステスのいるバー、ホストのいるバー、覗き部屋、ストリップ、性感マッサージ、ホテルへの出張サービス、SMからゲイ、レスビアンまでユーモア溢れる描写で東京の風俗を紹介してある。ただ欠点は掲載されている情報が古いということだろう。風俗の店は三カ月ごとに生まれたり消えたりする。トウキョウ・ピンク・ガイドという同じ名前の雑誌があつて、おれはそこに広告を載せているが、半年に一度の発行なのでやはり店の情報は古い。まあ雑誌にす

べてが網羅してあれば、おれのようなガイドは不要になるわけだが、「びあ」や「東京ウォーカー」のような雑誌が外国人向けに発行されることはこの国ではあり得ない。この国は基本的に外国人に無関心で、何かトラブルが起きるとすぐに外国人をすべて閉め出してしまふ。まあそういう事態のおかげでおれのような仕事が成立するわけだが、日本人のキャリアも爆発的に増えているというのに、エイズの騒ぎ以来ほとんどの風俗の店はいっせいに外国人を閉め出したままだ。

「いろいろ楽しみたいな、いろいろな場所に行ってみたいんだよ」

そう言ってまたフランクは照れ笑いをした。おれは思わずフランクの顔から視線を外した。

「本とか雑誌によると本当にいろいろあるんだね、まるでセックスのデパートみたいじゃないか」

フランクは椅子の脇に置いた焦げ茶色のショルダーバッグから、「トウキョウ・ピンク・ガイド」を取り出してテーブルの上に置いた。本ではなく雑誌のほうだが、ページ数も少なく表紙の写真の画質も悪くて、見るからによくないことが書いてありますよというマイナーな印象がある。雑誌、というかその小冊子をつくっているのは、ヨコヤマという名前の、元はテレビ局の報道部にいた五十代のおじさんだ。ヨコヤマさんはおれにとってもよくしてくれる。まったく儲かっていないらしいが、ヨコヤマさんはおれから広告料を取らない。日本人は外国及び外国人に向けてもつと情報を発信しなければならない、情報として国際性があるのはスポーツと音楽とセックスだがその中でセックスは人間性を解放する手段として最も手っ取り早い、というのがヨコヤマさんの考え方で、ほとんどボランティアのように資金繰りに苦労しながらその小冊子を発行している

のだといつも言っているが、要するにスケベなことが好きな人なのだ。

「ありとあらゆる手段で、性的欲求に対処している国なんだな、ぼくはぜひ歌舞伎町に行きたい、さっき君を待ってる間に地図で調べただけど歌舞伎町はこのすぐ近くだよ、ほらこのセックスマップを見て、歌舞伎町はまるでアンドロメダ星雲みたいにセックスショップのマークでいっぱいだよ」

小冊子の中の地図には六本木や渋谷や錦糸町や吉原、それに新宿二丁目や横浜黄金町、千葉栄町、川崎堀之内、などがあって、オッパイマークで風俗店を示してあったが、確かに歌舞伎町は群を抜いていた。コマ劇場から区役所通りにかけてオッパイマークがまるでブドウの房のように並んでいる。

「ケンジ、まずどの店へ行くのがいいだろうね」

「ええと、フランク、君はたくさんセックススポットに行きたいの？」

「そうだよ」

「手っ取り早くセックスをすることもできるよ、このホテルに女の子をデリバリーしてもらうことだってできるし、いろいろな店を見てみたいっていうのもわかるけど、そういうことをするとお金だっかかる」

おれ達がいるカフェレストランはそれほど広くない。フランクの声は大きくて、周りの客やボーイが何度かうるさそうな顔をしておれ達の方を見た。英語があまりわからない人でも、このての話は何となく察しがつくものらしい。

「ああ、金なら大丈夫だよ」

フランクはそう言った。

これからすぐ大晦日や新年を迎えるというのに、歌舞伎町は活気を失っていなかった。一昔前、風俗はおもに中年のおじさんのものだったが、今は若い連中も多い。恋人やセックスフレンドを捜したり、つき合っていくのが面倒くさいと思っている若い男が増えていようだ。外国だったらきつとゲイになるのだろうが、日本には「風俗」がある。

歌舞伎町の独特のネオンと、客引きの男達のキッチュな格好と、通りに立つ意味あり気な視線の女達を見て、フランクは、いいなあ、とおれの肩を叩いた。あの一流とはいえないホテルのカフェレストランでかなりみすばらしく目立っていたフランクだったが、一七二センチのおれより背が低くコートも着ていないのに歌舞伎町の町並みと人混みには自然にとけ込んだ。

オープンしたばかりの、外人ダンサーが出演するショーバブの客引きは全員黒人の男達だった。そろいの赤いウィンドブレーカーを着て、ストリップいかがですか、今なら一時間七千円です、と上手な日本語で通る人にチラシを渡している。フランクはチラシをもらおうとして一度無視された。微笑みながら、手を差し出したのだが、その黒人はフランクの横を通り過ぎていた日本人のグループに先にチラシを手渡したのだ。別にその黒人に悪気があったとは思えなかった。白人のフランクに対して少したく特別な感情があったのかもしれないし、貧乏そうな外人より日本人を優先しろという店側のリクエストもあったのかもしれない。いずれにしろ、それほど失礼